



片想い



疑惑

春日信彦

生徒会長選挙

2月20日（水）、糸島中学の前期生徒会長選挙が行われた。生徒会長に立候補したのは、剣道部部長の三島盾雄、新聞部部長の渡辺まゆ、演劇部部長の佐藤英作の2年生の三人だった。投票結果は渡辺118票、三島112票、佐藤48票で、生徒会長は渡辺まゆに決定した。慣例上、副会長は次点の三島盾雄がなることになっていたが、三島は辞退した。さらに、生徒会執行部からの脱退を申し出た。

三島は当然生徒会長に選出されるものと確信していた。にもかかわらず、落選してしまった。多くの生徒も三島が落選したことが腑に落ちなかった。イケメンの三島は生徒総会の議長を務めたこともあり、しかも九州剣道大会個人戦で優勝し、校内外でも知名度があった。成績も学年トップテンの常連で、人気はダントツであった。にもかかわらず、投票結果は啞然とする結果だった。

投票は体育館で行われた。投票箱は3箇所に設置され、1時から開始された投票は2時30分には終わった。その後、投票箱は一時的に安倍武蔵先生が預かり、3時から会議室で開票集計することになった。教頭、安倍先生の立会いの下、選挙管理委員から選ばれた2年生の5人によって厳正公正に開票がなされた。渡辺の親友である柏木が5人の中に含まれていた。

渡辺はこの結果に落ち込んだ。生徒会長は三島で、副会長が自分と予想していた。渡辺はこの結果を期待し、教頭に突然薦められた立候補を承諾した。予想外の結果に全生徒は騒然としたが、篠田教頭は満面の笑みを浮かべていた。渡辺は学年トップの成績で教頭のお気に入りであった。三島はエリートクラスを追放された異端児だった。三島は授業中に多くの質問をし、授業の進行妨害になるということでAクラスにクラス替えされていた。また、三島は教師に対して反抗的だった。

三島が副会長を辞退したため、佐藤に副会長を依頼したが、彼も今回の選挙に不信を抱き辞退した。結局、副会長不在の生徒会となってしまった。さらに、生徒会長就任一週間後から渡辺は学校を休み始め、会長まで不在となってしまった。理由は病欠であったが、病名ははっきりしなかった。会長不在のため、やむなく、教頭は渡辺が登校するまでということで生徒会長を三島に依頼した。三島は渡辺のことを思い登校するまでの間会長を引き受けることにした。

渡辺が病欠し始めてから、早1週間がたっていた。学年成績トップでエリートクラスのリーダーが病欠したことによって、父母からのエリートクラスへの批判が起きるのではないかと教頭は懸念していた。教頭は早期の登校を促すため、病欠して3日後には自ら渡辺の見舞いに行き、彼女の心情を聞き出そうとしたが、渡辺は本心を話そうとしなかった。渡辺の親友、柏木と峰岸も見舞いに行き、不登校の原因を探ろうとしたが、頭が重い、体がだるいとあいまいな病状の返事をするのみで、渡辺の心を知ることができなかった。だが、柏木には不登校の原因に心当たりがあった。

このまま不登校が続けば来年の高校入試に不利と考えた教頭は、一刻も早く登校するように、と渡辺の親友柏木に登校の説得を依頼した。教頭は渡辺を公立では偏差値トップのS高校か、私立の名門K高校に合格させたかった。去年は、エリートクラスの横山を名門K高校に合格させたことによって、教頭は父母から絶大な支持を受けていた。この人気を維持するには渡辺が必要であった。

柏木は教頭の依頼を断ることができず、悩んでいた。柏木は渡辺に登校させるための方法を峰岸に相談することにした。3月10日（日）午前11時に柏木は峰岸とマックで待ち合わせをした。柏木はどのように話を進めていいのかわかったが、まずは、峰岸の意見を参考にすることにした。柏木が窓際の席でぼんやり外を眺めているとトレーニング姿の陽気な峰岸が飛び込んできた。

ジーンズ姿の柏木は峰岸の笑顔を見つけると入口に駆けて行った。二人はジュースとバーガーを買うと元の窓際の席に着いた。柏木はオレンジジュースをストローで少し飲むと早速話を切り出した。「峰岸、渡辺、どうしたんだろうね、うつ病になったのかな～、まったく元気がないよね」柏木は峰岸の反応をうかがった。「病気だから、しょうがないんじゃない、もうしばらくすれば元気になるんじゃない」峰岸には渡辺のことを心配している様子がなかった。

柏木は教頭の依頼を考えると、とにかく早く渡辺を登校させなければとあせっていた。「まあ～ここだけの話だけど、渡辺は病気じゃないと思うのよね。三島君が原因だと思うのよ。なんとなく」柏木は言い終わるとバーガーを少しかじった。怪訝な顔をした峰岸は意味がわからず、問い返した。「それって、どういうこと？三島君、落選したもんで、渡辺にいやみを言ったとか？」峰岸もチキンバーガーにかぶりついた。

ちよっとうつむいた柏木は憶測を話すことにした。「あくまでも、憶測なんだけど、渡辺は三島君のことが好きなんじゃないかな～。ほら、去年の10月に三島君がエリートクラスから追放されたじゃない。あの時、渡辺はとても悲しそうな顔をしていたのよ。三島君がいなくなって元気がなくなったようにも思えるし。気のせいかも知んないけど」柏木は三島が追放されてからの渡辺を思い出していた。

峰岸はBクラスでエリートクラスのことを分からず、キョトンとして聞いていた。「エリートクラスのことを言われても困るんだけど、渡辺は三島君のことが好きだったのか？でも、不登校と三島君とどんな関係があるのよ？」峰岸は柏木が言わんとすることが良く飲み込めなかった。「思うんだけど、渡辺は副会長になりたかったんじゃないかな～。三島君が会長ならば、時々、生徒会のことで話ができるでしょう。きっと、そういう関係になりたかったんじゃないかと思うの」柏木は渡辺の気持ちをずっと考えていた。

峰岸は、少しは飲み込めたが、不登校になる気持ちが理解できなかった。「でも、恋の悩みだったら、いったい、自分たちはどうすりゃいいのさ？」峰岸は恋についてはまったく苦手だった。「今は、三島君が会長をやっているけど、渡辺が登校するようになれば三島君は会長を辞めることになるじゃない。クラスが別になったことで悲しい思いをして、今度は、三島君が副会長を辞退したことで、かなりのショックを受けたと思うのよ。なぜか、運命的に渡辺と三島君は引き裂かれているのよ。ロミオとジュリエットみたいじゃない」柏木は渡辺の気持ちを峰岸に伝えたかった。

峰岸は渡辺の片想いは飲み込めたが、三島との離別は偶然の出来事で、三島が渡辺を嫌って、彼女を避けているのではないと考えた。「こんな不運に悩むより、勇気を出してコクればいいじゃない。もしかしたら、副会長、やってくれるかもよ」峰岸は一気にジュースを飲み干した。「でもね～、渡辺にそんな勇気はないと思うよ。峰岸みたいにストレートじゃないから。もし、三島君が副会長をやってくれれば、渡辺も会長をやる気になるだろうけど、三島君は副会長になってくれそうもないしね。三島君の気が変わって、副会長をやってくれないかな～」柏木はじっと峰岸を見つめた。

峰岸はティッシュで口元を拭くと冷たい口調で言った。「無理ね、三島君は頑固だから。まあ、かっこよく言えば、男の中の男って感じだけど、いったん、決めたことは他の部員がなんと言っても聞かないしね。筋金入りって感じ」峰岸は三島の頑固な性格をあきれた顔で話した。柏木はゆっくりジュースをほんの少し飲むと、話したい内容を頭の中でまとめていた。「やっぱりね、男の中の男か。お願いしても無理と言うことね。と言うことは、やっぱり、あれしかないか」柏木は大きなため息をついた。

峰岸は柏木のしらけた顔をじっと見つめた。「あれってなによ？」峰岸は絶望的な顔をした柏木に尋ねた。「いや、やっぱり、話すのは、やめた、話しても、うん、と言ってくれないと思うから。もう帰ろうか？」柏木は椅子を少し後ろに引いた。峰岸は柏木の態度にムカついた。「なによ、言いなさいよ。言いたいことがあるんだろ」峰岸は大きな声を出していた。周りのお客が一瞬二人に顔を向けた。

一瞬固まった柏木は目を閉じた。ゆっくりと目を開けると気まずそうな顔で話し始めた。「あまり気にしないでね、昨日、ちょっと考えたんだけどね、三島君って、いったん決めたことは変えないと思うの。たとえ、渡辺は頼りないから、三島君に副会長になってほしいと言っても。そうよね、無理よね、突然、ひらめいたんだけど、勝負に負けたら、副会長を引き受けてくれるんじゃないかと・・・」柏木は峰岸をじっと見つめた。

峰岸は勝負と聞いてもいったい何を言っているのかさっぱりわからなかった。「三島君が誰とどんな勝負をするのよ？」峰岸は柏木を問い詰めるように強い口調で言った。「あ～、ちょっと言いにくいんだけど、怒らないでよ。三島君と峰岸は剣道部よね、三島君は男子部の部長よね、峰岸は女子部の部長よね。三島君と対等に話ができるのは峰岸しかいないのね。そこで、相談なんだけど、副会長をかけて、峰岸に三島君と勝負してほしいの。もう、これしかないと思うの」柏木は話し終わるとうつむいてしまった。

峰岸はあまりにも無謀な相談に啞然としたが、はっきりと返事した。「無駄ね、たとえ勝負しても、まったく勝ち目はないから。何度か稽古の相手をしてもらったことがあるけど、いまだかつて、一本も取ったことがないんだから。強いってもんじゃないのよ。まったく歯が立たないの。一本とるのも、無理、無理」峰岸は勝負にならないことをはっきり伝えた。柏木は峰岸が三島に勝てるとは思っていなかった。そこで、雲泥の差の実力を考えて、勝負の方法を提案した。

「峰岸の言っていることは、もっともだよ。三島君は九州ナンバーワンなんだから。だから、三島君に五本勝負を挑むの、もし、一本でも取れたら、峰岸の勝ちと言うのはどう？」柏木は大きく目を開き、少し前かがみになって話した。峰岸はあきれた顔で返事した。「柏木は剣道のことをよくわかってないみたいね。無理なのよ。今の實力じゃ、一本も取れっこないのよ。残念だけど、勝負は無駄ね」峰岸も力になりたいとは思ったが、事実を言う以外になかった。

柏木は肩を落としてうつぶさになってしまった。「絶対にダメ、奇跡を信じて、ダメ」柏木は小さな声でぼそりと言った。一瞬、峰岸に鳥肌が立った。峰岸の脳裏に寂しそうな渡辺の顔が浮かんだ。峰岸はしばらく黙っていたが、渡辺のために勝負する決意をした。「よし、奇跡を信じるか！ 負けるとわかっていても、渡辺のためだ、でも、果たして、三島君がこんな勝負に乗ってくれるかだよ、柏木」峰岸には自分たちの考えがこっけいに思えた。

柏木もクスクス笑いながら話を続けた。「それなんだけど、三島君って、剣道に関しては、すごくプライドが高いじゃない。きっと、峰岸に一本でも取られることはないと思うのね。だからこそ、この勝負、乗ってくると思うのよ。絶対乗ってくるよ、峰岸」柏木は自信にあふれた笑顔で峰岸をせきたてた。「う～、言われると、そんな気がしてきたよ。三島君はかなり、気が強いからね。よし、いざ出陣と行くか」峰岸は右手に握りこぶしを作った。

病んだ心

3月14日（木）卒業式は無事に終わり、職員室で3年エリートクラス担任の安倍先生は、愛読書の「剣の道」を開いて読んでいた。渡辺が不登校になってからは安倍先生の心はうつになってしまった。去年から彼の心は病んでいたが、なぜここまで心が沈んでしまったか理解できなかった。家庭科の先生であり、自宅で茶道を教えている和服姿の新島先生が静かにドアを開けて入ってきた。

新島先生は安倍先生の隣に腰掛けると声をかけた。「先生、最近、元気がないですね。どこか具合でも悪いんですか？」暗く無口になった安倍先生は一人孤立していた。「いえ、特にこれと言った病気ではないんですが、どうも、やる気がおきないんですよ。困ったものです。元気が出る薬はありませんか？」安倍先生は笑顔でぼやいた。「そう、お茶を一服されてはいかがですか？」新島先生はお点前を勧めた。

「お茶ですか、一度も経験がありません。でも、一度は飲んでみたいと思っていました。お邪魔してもよろしいですか？」安倍先生は病んだ心をじっと見つめたかった。「ぜひ、いらしてください」早速、新島先生は南風台の自宅に案内した。南風台はセレブ街で高級住宅が立ち並んでいた。トヨタマークXに乗った安倍先生は新島先生のオーディーTTクーペの後について行くと、豪華な洋風住宅が立ち並ぶ中、広い庭を構えた平安朝を思わせる静かなたたずまいの瓦葺の新島邸に到着した。

新島先生はM銀行頭取のご令嬢とうわさされていたが、自宅を見て納得した。彼女は28歳の独身で、花婿募集中であったが、父親が勧めた数回のお見合いを断り、いまだ独身であった。新島先生は安倍先生がもし独身ならばプロポーズしたいと思うほどの美人であった。リビングに案内され、少し待たされると白髪の恰幅のいい紳士が現れた。彼女の父親であった。「よく、お越しいただきました、矢重の父親です。いつも、お世話になっております」紳士は軽く頭を下げた。

母屋の東に石畳でつながっている茶室に案内された安倍先生は異次元の小宇宙に迷い込んだような不安感に陥った。「何か、場違いなところにやってきたみたいで、落ち着きません。うまく、お茶が飲めるか、心配です」安倍先生は初めての茶室に動揺してしまった。「緊張しないでください、茶道には一定の作法がありますが、先生は気にしないでください。お茶をいただき、心を癒すつもりで、リラックスしてください」新島先生はお茶の楽しみ方を教えることにした。

「豊臣秀吉に使えた茶聖千利休をご存知でしょう、茶聖は茶道とは自由と個性だとおっしゃられています。きっと、お茶をたしなむことによって、心を開放し、自分の個性を見つめなさいとおっしゃっておられるんだと思います。先生も、今は心を開放し、お茶の宇宙を楽しんでみてください。何か、感じる事があれば自由におっしゃってください」新島先生はお茶の本質を知ってもらいたかった。

静かにお茶を点てる新島先生は光り輝くオーラに包まれた天女のように思えた。正座した安倍先生はお茶を左手に乗せ、右手で二回時計回りに回転させると、お茶を三回で飲み干した。新島先生に言われた作法でお茶をいただくと静かに目を閉じた。安倍先生は突然話し始めた。「私の剣は穢れています。人を守るために剣の道に入りました。でも、今の私の剣は人殺しの剣になってしまいました。どうしていいかわかりません」安倍先生はじっと固まったように身動きひとつしなかった。

新島先生は安倍先生の心の病の深刻さを即座に感じ取った。「剣道のことはわかりません。でも、茶道も剣道も極めるものは、愛ではないでしょうか？茶聖は愛を貫くために自害したのだと思います。人にとって最も大切なものは“権力”ではなく“愛”だとおっしゃっているんだと思います。私はまだまだ未熟者ですが、権力に負けない愛を持ちたいと願っています」新島先生は心の底に秘めた思いを打ち明けた。

安倍先生は静かに目を開けた。「そうです。武道とは権力を手に入れるためのものではないのです。むしろ、権力と戦うためのものです」安倍先生は新島先生に深くお辞儀をすると学校に戻った。学校に戻った安倍先生は体育館北側にある武道館に向かった。武道館の部室に到着すると稽古を終えた三島が着替えていた。三島を見つけた安倍先生は、三島にお願いをすることにした。

「三島、話があるんだ。ちょっと聞いてくれ。副会長のことなんだが、思い直してやってくれないか。渡辺一人じゃ、生徒会は無理だ。三島、助けてやってくれないか。どうだ」渡辺に登校させるにはこれしかないと考えていた。「先生、一度決めたことを変える気はありません。副会長は佐藤に頼んでください」着替えた三島は部室のドアを開けようとした。「待て、わかった。悪かったな。晋太郎どうだ。びしびし鍛えてやってくれ。手加減はいらんぞ」晋太郎は安倍先生の子供で、剣道部に所属していた。

三島は返事しなかった。後ろも振り向かず静かにドアを開け出て行った。三島が部室から去る姿を見ていた峰岸は三島の姿が消えるのを確認して、男子部の部室のドアをロックした。安倍監督は大きな声で返事した。「入っていいぞ」安倍監督は稽古するつもりだったが、体がだるくて帰ることにした。立ち上がりドアに向かっていくと、ゆっくりドアが開き峰岸の緊張した顔が現れた。

「峰岸じゃないか、今頃、何のようだ？」女子部員はすでに帰っている時間であった。峰岸は中に入ると臭いにおいに鼻をつまんだ。「男子の部室は臭いですね、ちょっといいですか、監督、相談があるんです」峰岸は安倍先生の前に立ちはだかった。「いったいなんだ、もう遅いから、相談なら、明日にしてくれ」安倍先生は峰岸の右肩をポンとたたいた。峰岸は立ち退こうとしなかった

「先生、今じゃないと、困るんです、とにかく、話を聞いてください、お願いします」峰岸は両手を合わせた。安倍先生は顔をゆがめると奥の長椅子に向かった。「いったいなんだ、手短に頼むぞ」安倍先生は椅子に腰掛、峰岸は正面に立った。「三島は強いんです。何度、対戦しても、一度も一本取ったことがありません。明日、練習試合をします、とにかく一本取りたいんです。どうすれば一本取れますか？」峰岸はつばを飛ばしながら、真っ赤な顔で話した。

安倍監督はあっけにとられた表情で返事した。「落ち着け、そうあせるな、いずれ一本取れるときがくる。三島以上に稽古に励め」安倍監督は峰岸の短気をなだめた。「明日、一本とりたいんです。とにかく、何か秘策はないですか？」峰岸は両手を合わせて頭を下げた。安倍監督はあきれた顔で答えた。「今の實力じゃ、一本は取れん。剣道にはまぐれも奇跡もない。毎日、地道に稽古したものが強くなる。無茶なことは言わず、地道に稽古に励むことだ。いいな」安倍監督はかっとなった峰岸を落ち着かせながら、諭した。

「確かに、剣道にはまぐれや奇跡はないのはわかっています。でも、明日、どうしても一本とりたいんです。何か、アドバイスください」峰岸は土下座してお願いした。「峰岸、どうしたんだ、今、一本取れなくても、きっと取れるようになる。馬鹿な真似はよせ。帰るぞ」安倍監督は立ち上がると右足を一步踏み出した。「待ってください」峰岸は左足にしがみついた。「峰岸、馬鹿な真似はよせ、はなさんか」安倍監督は怒鳴った。

「教えてくれるまで放しません、お願いします」峰岸は全力でしがみついた。「わかった、とにかく、脚を離せ」安倍監督は峰岸を起こすと椅子に腰掛けた。「困ったもんだ。そうだな～、可能性があるとするば、鏝ぜり合いから、引き胴ってぐらいかな。奇跡に近いけどな。思いつくのはこれくらいだ。これでいいだろ～、峰岸」あきれた顔で答えた。「5本勝負をやるんです。一本とれば勝ちなんです。他に、ありませんか？」峰岸は両手に握りこぶしを作っていた。

「三島は手足が長く、足さばきはピカーだ。まともな間合いでは一本を取ることは不可能だ。鏝迫り合いからの引き技しかないだろうな。三島はメンとコテが決め技だから、それに耐えて、鏝ぜり合いにもって行け、後は、神頼みだな」安倍監督は思いついたことを言った。早くこの場から去りたかった。「わかりました、引き技にかけてみます。ありがとうございました」峰岸は深く頭を下げた。ほっとした安倍監督は恐る恐る立ち去った。額には汗が流れていた。

父への手紙

3月15日（金）の朝、中学生の自殺のニュースが流れた。自殺したのは糸島中学1年生、安倍晋太郎君であった。自宅マンションのベランダから飛び降りたと推定された。ベランダには晋太郎君のスリッパがそろえてあった。このニュースが一気に全校生徒に伝わりパニックを起こした。安倍先生は気がおかしくなり、病院に運ばれていた。自殺の原因ははっきりしなかった。彼は秀才で剣道部に所属しており、模範的な学生であった。

昼休みに、峰岸と柏木は新聞部部室の片隅で自殺のニュースの話に夢中になっていた。晋太郎をよく知っていた峰岸は自殺を不審がっていた。「どうして、自殺したんだろう。いじめじゃないと思うよ」晋太郎は優しい性格であったが、いじめられるタイプではなかった。クラス委員長で生徒会の執行部役員もかねていた。正義感が強く、はきはきと意見を言う生徒だった。いじめは、ほぼ考えられなかった。

柏木は晋太郎のことはまったく知らなかった。「本当に自殺だったら、いったい何が原因だろうね。いじめじゃなかったら、いったい何よ？」新聞部副部長として、柏木は意外な生徒が自殺したことに興味があった。「わかるわけ、ないじゃない。お父さんともめたのかも？」峰岸は親とのいざこざが原因ではないかと考えていた。柏木は上目使いで考えていた。「いじめじゃなかったら、家庭の問題としか考えられないね」柏木も親子のいざこざを考えた。

部室のドアのノックの音がすると三島が入ってきた。柏木は朝のホームルームの前に、三島に声をかけていた。慥然とした顔の三島は何か尋問されると思い不機嫌であった。「よう、晋太郎のことだろう、俺は何も知らん。はっきり言っとくが、俺はいじめたりなんかしてないからな」三島は疑われていることを感じ、二人にいじめてないことを断言した。「三島君がいじめたりなんかしないことぐらい、わかっているわよ。ただ、最近、晋太郎君に変わったこととか、気づいたこととか、思い当たること、なかった？」柏木は三島が晋太郎の異変を最も知っていると考えた。

三島はしばらく黙っていたが、思い出すように話し始めた。「そうだな～、ちょっと気になっていたんだが、生徒会長の選挙が終わったあたりから、あいつ、急に気合がなくなったと言うか、元気がなくなったように感じたな。何か、俺を避けているようにも思えたな。考えすぎかもしれないけど」三島は晋太郎の態度の異変を話した。「それって、練習の話？」柏木は確認した。「ああ、稽古のときは、おれに勝ってやろうという、気迫というか、気合があったんだけど、最近、どうも、弱弱しくて、具合でも悪いのかなと思っていたんだ。やはり、何か心配事があったんだな」三島は最近の晋太郎の沈んだ態度を思い出していた。

柏木と峰岸は三島の話から選挙のことがかかわっているんじゃないかと考えた。しかし、選挙と晋太郎がどのように関わりあっているかは皆目検討がつかなかった。「やはり、家庭のことで何か心配事があったのね。誰にも相談できずに、苦しんで、飛び降りたのね」柏木は三島が自殺にかかわっていないことをはっきりさせた。「あ、もう時間」柏木は立ち上がった。三人は急いで部室を飛び出した。

放課後、武道館では部員が見守る中、三島と峰岸が向かいあっていた。5本勝負が開始されていた。峰岸はいつも以上の氣勢を挙げ、間合いを取りながら前後に動いていた。峰岸は引き技を意識していたが、いざ、試合になると、鏑迫り合いになるまでにメン、コテを決められてしまっていた。立て続けに、メン、メン、コテ、と取られてしまった。峰岸は、間合いをつめることに恐怖を感じ始めた。

峰岸の頭は真っ白になってきた。まったく、どうしていいかわからなくなっていた。間合いをつめなければ、鏝迫り合いに持ち込めない。かといって、間合いをつめると、三島のメンの間合いに入ってしまう。渡辺のことを思うと、峰岸は涙が出てきた。とにかく、メンをかわして、体当たりする以外に方法はないと考えた。峰岸は氣勢とともに体当たりに出た。三島は峰岸の戦法を読んでいた。

三島はメンを打つふりをして、鏝迫り合いに持っていった。峰岸はうまくいったと思ったが、三島の上から押さえつける力はハンパなかった。峰岸が一瞬ひるんだ瞬間、三島の引きメンを食らってしまった。メンが決まった瞬間、呆然とした峰岸は竹刀を落としてしまった。峰岸は自分がやろうと思った引き技を三島に決められて、戦闘意欲を失ってしまった。「どうした、峰岸、あと、一本だぞ」三島は峰岸を奮い立たせた。

竹刀を拾い構えた峰岸であったが、心は敗北感でいっぱいであった。最後の一本、最後の一本、心で何度もつぶやくと、今度、上から押さえられたら、即座に、引き胴を決める作戦を立てた。もはや、奇跡を信じる以外、戦うことができなかった。峰岸は、先ほどと同じように、氣勢とともにロケットのごとく突進した。三島はがっちりと鰐をあわせ押さえつけた。

そのときであった、三島の脳裏に晋太郎が現れた。一瞬、三島の体が硬直した。峰岸はこの瞬間を逃さなかった。「胴！」峰岸の引き胴が見事に決まった。三島はいったい何が起きたのかわからなかった。金縛りにあっていた。周りを囲んでいた部員たちから大きな拍手が起きた。奇跡の勝利を確信した峰岸は両手を突き上げジャンプした。稽古後、峰岸は再度、三島に副会長になってくれることの約束を確認すると、柏木にそのことをメールで報告した。

渡辺は3月20日、登校してきた。そして、峰岸と柏木に重大な報告をした。それは、篠田教頭のはからいで渡辺が名門K中学に転校する話であった。その結果、生徒会長は三島が引き受けることとなった。また、安倍先生は一身上の都合で辞職した。教育委員会は晋太郎の自殺の原因を一ヶ月に渡って調査したが、いじめが原因ではないということになり、調査は打ち切られた。

辞職した安倍武蔵は自分の残りの人生を晋太郎の人生に置き換えることにした。晋太郎の夢は剣道を世界中に広めることであった。安倍武蔵は晋太郎に代わり、世界中に剣道を広める決意をした。四月に入り、笹山公園を彩った満開の桜を目に焼き付けると福岡国際空港へ向かった。新天地に飛び立つ飛行機の中で、安倍武蔵は茶聖千利休を思い浮かべ、静かに目を閉じ、一通の手紙が挟まれた愛読書“剣の道”をしっかりと抱きしめた。

お父さんへ

僕は小さいときからお父さんに憧れ、日本一の剣士を目指して頑張ってきました。でも、2月19日に僕の人生は終わりました。“剣の道”に挟まれていた十数枚の投票用紙を見てしまいました。その用紙には、渡辺まゆ、と書かれていました。僕は目の前が真っ暗になりました。この投票用紙がどのように使われるかはすぐに理解できました。3月21日、生徒会長の発表がありました。僕は、部長の三島先輩が生徒会長になると確信していました。周りの仲間もそのように思っていました。でも、結果は違っていました。

僕は何度も悪夢を打ち消しました。でも、この目で見えたあの投票用紙が頭から離れませんでした。三島先輩の顔を見ることもできなくなりました。尊敬していたお父さんは僕の心から、いつの間にか消えていました。お父さんを失った僕は、どのように生きていけばいいのかわからなくなりました。もはや、立っている気力もなくなってきました。早く、お母さんに会いたくなってきました。今から、お母さんのところに行きます。さようなら、お父さん。

片想い

<http://p.booklog.jp/book/67792>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/67792>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/67792>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ